

プロト工業化とプッティングアウト・システム

岡 田 清

1. 産業革命の連続説と不連続（断続）説

経済史研究者の間で産業革命に対する見方が大きく二つに分かれていることは広く知られている。産業革命という用語が示すように18世紀から19世紀にまたがるイギリスの工業化を不連続（断続）的で革命的な変化であったと見る見方と、革命という用語にもかかわらず実態は連続的で、革命的であったとはいえないとみる見方の二つがそれである。不連続説として有名なのはアーノルド・トインビーの1880—81年の産業革命に関する講義であるが、このような不連続説は産業革命を「衝撃的な出来事」(thunderbolt) と見るだけでなく、封建制から資本主義経済へ体制転換をもたらした極めて象徴的な出来事だと見られるようになった。それに比べると資本主義ははるかに古く中世にまでさかのぼることができるという見解さえある。しかし、このような「発生論的アプローチ」(genetic approach) を別とすれば、少なくとも「近代資本主義」は1760年以後の産業革命を契機とするものであるとみる見方が支配的である¹⁾。

1) アシュトン(T. S. Ashton, (1954) p. 56) は次のように述べている。「特に、一少なくともマルクスの造語として広く普及していなかったなら—中世初期以来起こったすべてのことが資本主義によって説明される。マルクスはもちろんそれを搾取と関連づけた。ゾンバルトは、生産手段が労働者とは違う階級—動機が利潤であり、その方法が伝統的方法、すなわち手工業者とは違う合理的な階級による所有という理由によって手工業システムとは違う生産システムとして、この用語を使った。とりわけ資本主義精神を強調した。他の要素、すなわち借り入れ資本あるいは信用のような要素は、シュンペーターなどの後世の学者によって付け加えられたものである。しかし、資本主義が合理的技術の存在、(労働の結果としての産物ではなく)

「近代欧州経済史序説」(欧州経済史序説, 1938年初版, 改定版1981年, 岩波書店) という名著を残した大塚久雄は, 産業革命と近代資本主義の関係について次のように述べている。「典型的資本主義国とよばれるイギリスをはじめヨーロッパの諸国において, あの一八世紀末以降のいわゆる『産業革命』 industrial revolution を画期として完成した姿容を示し, その個性的特質が明確に現われるにいたったものであることは見紛うべくもない。であるとすれば, 歴史的個体としての西洋の『近代資本主義』を特徴づける『決定的要因』 specificum はこの産業革命の経過のうちに見出されねばならぬことはおのずから明らかであろう。ところで, この『産業革命』の過程において, 何よりわれわれの目をうつ事実がいわゆる『工場制度』 factory system, すなわち機械技術を根幹とする大規模な工業経営様式の急激な一般的成立であり, またこれを焦点として国民経済全体がその相貌を変ずるにいたるということも, 現在の経済史学の水準で異論のないことである」(pp. 143-144)

このように産業革命の衝撃の大きさを強調すればするほど, 産業革命以前の経済が産業革命期に飛躍的に発展したと思われがちである。もしそうなら飛躍的發展のための条件は何か, その程度はどうかという命題が生まれることになる。したがって, 産業革命期の経済が「革命的」 revolutionary あるいは「飛躍的」 spurt であったのかどうかというテーゼの検証が必要になる。それは例えば経済発展段階説をどう見るかというような歴史観とも密接に関連することになり, 経済史研究に大きな問題を提起するものでもある。堀米庸三(1964, pp. 71-102) は歴史の時代区分についても同様な問題があることを指摘しており, 大塚久雄は断絶(不連続)面に力点を置き

労働を売るプロレタリアート, 無限の利潤を目的とする資本家階級からなると見る見方にはほとんどの人が同意する。この仮定は人類史のある段階で—おそらく紀元後11世紀に—はじめて人間が合理的になり欲張りになったということである。ゾンバルトに続く経済史家の主な仕事はその合理性と欲張りの起源をつきつめることであった」

ていたという馬場哲教授の指摘（馬場哲，小野塚知二（2001），p. 2）がある。

このような歴史の不連続説とは違った連続説の立場をとっている経済史家として知られるのは，クラバムやアシュトン，クズネツツなどであるが，今では多くの学者が連続説に傾いているとみてもよさそうである²⁾。

[補足] モーリス・ドップ (M. Dobb, (1946)) は，時代区分と産業革命について次のように述べている。

「諸制度間の境界が歴史の頁にはっきりした分界線で引かれると考えているなどと思ってもらっては困る。歴史上の時代区分についてどんな議論をも信じないひとびとが正しくいっているように，種々の制度は現実には決して純粋な形では見いだされるものではないし，また歴史のいかなる時代においても，その前後の二つの時期の特徴的な諸要素が，ときには極端な複雑さでいりまじっていることが分かるはずである。……時代区分がそこで行われ，その時代はそれぞれ特有な経済体制によって特徴づけられるというような，発展についての概念のなかには，次のような意味が，どうしてもひそかに含まれていねばならないようである。それは経済発展というものには決定的な時点があつて，その時点にさしかかるとテンポが異常に早められ，またそこでは，事件の流れのなかでの急激な方向転換という意味で，連続性がたち切られるということである。

歴史のながれの方向が急激に変化するこれらの時点は，古い制度から新

2) 歴史の連続・不連続の問題は次のような著書・論文の中に見られるが，ここではそれを詳細に述べるのが目的でないので項目を掲げて述べているものだけを挙げるにとどめる。

①W. W. Rostow, (1990), *The Stages of Economic Growth-A non-communist manifesto*, Third edition. Appendix B, pp. 189-199.

②F. F. Mendels, (1973), *Proto-industrialization: The First Phase of the Industrialization Process*, *Journal of Economic History*, XXXII, pp. 257-260.

③J. Kocka, (1978), *Entrepreneurs and Managers in German Industrialization*, in *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol. vii, edited by P. Mathias, M. M. Postan, pp. 508-511.

④馬場 哲，小野塚知二（編），（2001），*西洋経済史学*，東京大学出版会。

しい制度への移行を印象づける社会革命に照応する。したがって、経済発展についての、もっぱら連続的な量的な変動という考え方からつくられる次のような見解とは、対照的である。その見解とは、変化を、人口であろうと、生産力であろうと、市場であろうと、分業であろうと、資本の量であろうと、何かの増大する原因の単純な関数としてみようとするものである。その後の見解の主要な欠点は、次のような決定的な意味をもつ新しい特徴を無視し、あるいは無視しないにせよ、過少評価するという傾向である。またこれらの見解の欠点は、新しい状況をば過去の状況の産物である思考範疇で解釈することに心を向けやすいことであり、また人間性の不動の特徴とか、「普遍の真理」に向けやすくなることである。独自の「時代精神」というもので作り上げられる発展の理論は、少なくとも、こうした傾向を避ける長所をもっている」(邦訳, I, pp. 16-18)

ドップは産業革命について次のようにいう。「このとき(チューダー朝)以後の資本主義の経済の上では、二つの決定的な時点があることは明白である。その一つは一七世紀という決定的な時期の政治的、社会的変動のなかにあり、アンウィンの調査が明らかにした特許組合内部の闘争と、クロムウエルの革命で頂点に達する独占反対の議会闘争とを含んでいる。そしてその闘争の成果は、王政復古の時期のある程度の妥協と反動にもかかわらず、決して没却することはなかった。第二の時点は、一八世紀末および一九世紀前半の産業革命である。産業革命はまずもって経済的な意義をもつ事件であって、クロムエル革命ほど劇的ではなかったけれど、それに劣らぬ重要な影響を政治の領域に与えた。それは資本主義経済の未来の全体にとってまったく決定的なものであり、産業の構造および組織のまったく根本的な変化を表現したものだから、あるひとたちはそれを近代資本主義の陣痛とみなし、したがってまた中世以来の経済的・社会的発展のもっとも決定的な転換期は産業革命であると考えてに至っている。……首尾一貫するためには、われわれは中世の生産様式から資本主義的な生産様式への

移動において、決定的な転換期をただ二つだけ認めるのはよくないのであって、三つの時期を認めねばならないのではないか。すなわち、封建制の解体をものがたる第三のもっとも初期の時期をみとめねばならないのではないか。そして、もしわれわれがそうしたより初期の、決定的な移行期があったことを認めるならば、その時期と一六世紀後期との中間の時期における経済制度をどう呼ぶべきであろうか。その時期はわれわれの年代設定によれば、その生産様式に関するかぎり、封建的でなく、また資本主義的ともまだいえないものであったように思える」(前掲書, pp. 27-29)

ドップは、封建制から資本主義の中間に「第三のもっとも初期の時期」という表現を使っているが、それが後にプロト工業化と呼ばれるようになった時期であるとみてよかろう。

産業革命は、ニューコメンからジェームス・ワットにいたる蒸気機関の応用による織物生産量の急増によって始まったことは周知の通りである。このような新技術の導入の効果とともに重視されなければならないのは、それと対をなす工場制度の導入による新しい生産様式の伝播・拡大が進んだこと、すなわち「生産組織」の革命的変革が大きな影響を残したことは産業革命研究家の間では広く知られていることである。マンデルスが指摘するように、このような産業革命によって生まれた工場制度を工業化の第2局面とするなら、それ以前の工業化、すなわち「プロト工業化」を第1局面として工業化が既に進行しており、それがマントウ (Paul Mantoux, (1928) chpt. 1) のいう産業革命への「先行条件」として進んでいたとするなら産業革命は、言葉の上では革命といわれながらも革命的断絶があったというよりも連続的工業化であったという見方が成り立つ。産業革命を工業化の第2局面といい、それ以前の工業化を第1局面としての工業化を「プロト工業化」というのであれば、産業革命は不連続(断続)的工業化というよりはむしろ連続的工業化とみる正当性が生まれてくる。したがって、

プロト工業化の存在そのものが工業化の歴史研究にとっても極めて重要な意味をもつことになる。

ここでは、このことを念頭においてプロト工業化と、それを支えたプッティングアウト・システムについて検討することとする。

2. プロト工業化

1) 産業革命以前の工業化

「プロト工業化」(Proto-industrialization) という用語がでてきたのは、メンデルス (F. F. Mendels, (1972)) が「プロト工業化：工業化過程の第1局面」という論文を発表したことに始まる。この論文は「機械工業がはじまるかなり前に、ヨーロッパの多くの地域は、工業に配分される潜在労働力の割合が増加するようになったという意味でますます工業化されるようになった。だが、その種の工業化は一伝統的な組織であり、主として地方の手工業であり一現代経済に関して人々がえがくイメージとほとんど一致しない。しかしながら、『工業化以前の工業』pre-industrial industry の成長を『工業化』過程の一部ないし一画とみなし、あるいはむしろ現代工業化に先んじ、それを準備した第1局面とみなすことは認識上の価値があると同時に教授上の利点もある。よい名前がないので私が呼ぶプロト工業化というこの第1局面は、伝統的な組織でありながらも急成長し、かつ市場指向的な工業として、主として地方工業についてみられるものであり、それは以下に示すような地方経済の空間的組織の変化ももたらすようなものでもあった。現代的、工場制ないし機械工業化の第2局面は第1局面とは著しい対照をなす経済的変化のメカニズムに反応したものであった。かくして、このような文脈からいえば、『産業革命』は経済が局面2に入る理論的な瞬間に関連するといえる」(p. 241)

この引用から明らかなように、プロト工業化は、それに続く工場制工業への準備段階としての工業化であり、工場制工業を第2局面というならば

プロト工業化は、そこに至る第1局面ということになる。したがって、いわゆるマニユファクチャー（あるいはマニユファクトリー）だけでなく、プッティングアウト・システムを含む主として地方工業の変化のメカニズムがプロト工業化の特色であるといえよう。

以下では、このことを念頭におきながら初めにメンデルス論文の主要な論点とりあげてみよう。

①伝統的なヨーロッパは土地依存型の農業経済であり、農業経済に固有な著しいパラドックスに直面していた。高い人口密度にもかかわらず農繁期（収穫期）には労働力不足、つまり「収穫労働の不足」問題があった。年間労働力の平均生産性は決して高くはなく、農業の労働生産性もまた同様であった。地方工業の役割は、地方雇用の時間的パターンの改善にあり、労働生産性の向上というより労働者の生産性の改善にあった。このような背景から農民は失業ないし過少雇用の解消策として年間の労働時間の平準化のために工業生産に着手するようになった。集計額としてみたり、一人当たり生産高でみると確かに増加してはいるが、工業に転じても農民の生活水準が高くなったわけではなかった。しかし、都市部の商人企業者にとっては資本蓄積の機会が増えていった。とはいってもその資本は固定資本ではないためサンク・コスト（埋没費用）は少なく、原材料などに投下された流動資本の回収は容易であり、需要が期待できるかぎり、農業生産とは違っていた。

②18世紀後半になってイギリスの繊維製品に対する需要は急速に高まり、都市企業者は急速なコストの上昇に気づきはじめた。すなわち、費用曲線は左にシフトした。農業と工業の労働時間配分は、農業に優先配分をしたとしても天候によって制限されると同時に、個々の生産工場にはさまざまな制約があったため、生産の増大は労働者の分散を促し、経営と労働の距離も広がっていった。費用曲線は、燃料、原料、木材、水資源に依存する限り、比較的傾斜が急であった。水車は夏には水がなくなるためにとまり、

冬には凍結によって使えなくなる。18世紀における工業技術の革新が現れ、採用されるようになったのは、このような障害があったからであった。生産費サイドの制約から生産関数の急激な変化を必要とするようになったのである。

③他方、プロト工業化が進む過程で、商人企業者の資本蓄積が進み、そのことが（比較的高価な）機械工業の採用を可能にした。そのことは企業者階級と企業者能力の向上に役立ち、近代工業化の始まりに大きな役割を担うことになった。最初の工場創設者の多くが以前は商人であったのはそのためである。同様に、イギリス産業革命の機械の創始者の多くが、古い手工業部門で訓練を受けてきたし、その時代の先進科学との密接な接触機会をもっていた。一方、食糧自給をしなくなった人口が増加するにつれて農業製品市場が生み出されるようになった。一部の地域は工業に特化し、他の地域は余剰食糧を供給する商業的農業に専念したことが、次の局面への準備となった。かくして工業化と都市化と余剰食糧とが同時並行的に進み、ますます大きくなっていった。先行的なプロト工業化によって第2局面が促進されていったのはこのような理由からである。このような結び付きは、指導的工業地域、主としてイギリスで機能した。

④指導的工業地域に対する後続的地域は、外からの力、特にイギリスのチャレンジを受け、一部では上のような力を越える地域も出るようになった。しかし、比較的后進的な大陸地域でも、プロト工業化前の地域でさえ、現代工業の道へと誘導されていった。イギリスの製造業における先導性を感じなくなったのは、正確にはプッティングアウトに携わっていた企業者であり、下請け製造業に依存するようになった労働者であった。市場の力とは無関係な人々と商業的農業に完全に特化した人々は、手工業に従事していた人々と同様に、現代工業への転換の必要性を感じなかった。政府は、時々旧式の、労働集約的工業の衰退によって発生した失業を吸収する点まで現代工業の成長を促進するのが賢明であることは知っていた。ロ

プロト工業化とプッティングアウト・システム

一カルの熟練が十分でない時には、企業者や政府は現代工業の創設に役立つために外国人を招聘することもよく行われた。19世紀前半のベルギー、フランス、プロシヤがその例である。主要工業国からの挑戦の力は、プロト工業化が進んだところでは一層強くなっていった。さらに、プロト工業化が、先進地域と同様に、資本蓄積、市場とのコネクション、企業者の熟練、農業の進歩などを生み出していたところでは、このような挑戦への反応がすぐに現れたようである。現代工業が、製品特化に変化があるときでも、前に手工業があった地域に立地するようになったのはそのためである。その例外は特別な環境、すなわち全く新しい工業地域が創りだされたキャピニュー、ロレーヌ、クリボア・ログなどの新しい燃料や原料の発見あるいは結び付きが現れた場合である。

2) プロト工業化と労働問題

「余剰労働」概念の理論的重要性と政策的含意はほとんど20年間に渡って大きな関心を集めた分野であった。しかし、工場制度の影響を受けた農村工業 (cottage industries) の盛衰のメカニズムとの関係は論議されてきたとはいえない。プロト工業化期には閑散シーズン (たとえば農閑期) の余剰労働は利用されるということはなかった。したがってある部門から別の部門に労働を「引き取る」というような経済問題はなかった。機械工業からの競争に直面したことによって地方工業の拡大が鈍化した場合には、労働力の増加分は都市に移動せざるをえなかった。この労働移動は初めは季節的ないし一時的であるが、農業は結局その緩衝部分を失い、労働力不足が顕在化する。新しい作物や新しい農業技術が労働集約的ないし季節的バランスを失った場合にはなおさらである。しかし、このような労働力不足は労働節約的技術変化によって救われた。かくして都市工業が無制限の労働供給の恩恵にあずかったかどうかは地方工業が収縮するメカニズムとその率に依存することになる。

プロト工業化とプッティングアウト・システム

以上はメンデルス論文の概略的説明であるが、プロト工業化過程は、純粹にそうではないとしても、農村手工業からプッティングアウト・システムへ、続いてマニュファクチャーを経て、産業革命による工場制工業へと発展するメカニズムがどのように展開したか、その担い手は手工業者からか、プッターズ・アウト（商人）からか、それとも工場制工業にもっとも近い位置にいたマニュファクチャーからか、その連続性を立証する手掛かりとして工業化に光を当てようとしたのが「プロト工業化」モデルであるということができるであろう。

3. 3つの工業組織とプッティングアウト・システム

1) 3つの工業組織

産業革命後の企業家・経営者と18世紀から19世紀にかけての企業家・経営者とはどの程度の連続性があるのか、工場制工業への転換によってその機能はどのように分化していったのかを知るためには産業革命以前の状態について検討しておく必要がある。

工場制工業に転換する前の工業は、3つの組織形態によって成り立っていた。①職人工業 (craft industry, Handwerk), ②プッティングアウト・システム (putting-out system, Verlag), ③マニュファクチャー (manufactory, Manufaktur) の三つがそれである。

コッカ (J. Kocka [1978] pp. 498-500) にしたがって、3つの(ドイツの)組織形態の内容を取り上げて見よう。

①職人工業

1800年頃の典型的な親方職人 (master craftman) は、普通は一人だけで、時には数人の助手ないし徒弟をもって生産するが、財務計算の意識は乏しく、機械もなければ、分業もほとんど行なわれていず、生産も一人で行っていた。原料は自分で購入し、製品はローカル市場で顧客や商人に直接販売していた。利潤は低く、事業の拡張、革新へと駆り立てるものはなかつ

プロト工業化とプッティングアウト・システム

た。1800年頃には農業外の職業に従事していた人の少なくとも半数が独立の職人であり、およそ100万の職人がいたが、工業化の第1局面がこれらの職人の職場から発展したということにはなかった。

②プッティングアウト・システム

プッティングアウト・システムと職人工業との違いは、職人工業が分散型であるのとは違い、流通は集中型であり、原料の購入も集中方式であり、生産手段の集中的所有となっていた。もっと進むと分業の調整も行われるが、生産は職人工業と同様に分散型である。労働者は共通の、あらかじめ決まった引受人、すなわちプッターアウト putter-out (フェアレーガー Verläger) のために生産したが、プッターアウトはそれを自分で消費するのではなく、普通はローカルの市場よりもっと広い市場に、資本主義原則にしたがって販売した。プッターアウトは、商品の性質、数量、品質、価格までも決定するようになった。時には職人に原料や半製品を供給したり、道具を提供することもあった。そのため職人はプッターアウトに従属的であった。プッターアウトは、生産工程にも影響を与えるようになり、作業工程を組織することもできた。その結果、職人は専門的小屋住み職人になった。

③マニユファクチャー

ここでは生産組織と仕事の執行の間に明確な職能分離があるほど職人工業に比べて一大きく、分業的事業所をもっていたが、工場と違う点は機械がないこと、プッティングアウトと違う点は地理的に集中していることである。職人工業やプッティングアウトとは対照的に、労働者の多くが家庭と職場が分離している。

以上の3つの組織形態があり、これはイギリス、ドイツなどのヨーロッパ諸国に広く共通する組織形態であるが、いずれも純粋型であることは少なく、複雑に入り組んでいた。ここでの問題点は、工場制工業へと発展する過程で、どれが生き残り、どれが衰退していったかである。あるいはプ

ッターアウトあるいはマーチャント・マニュファクチャラー（商人・生産者）は商業的職業，例えば銀行業や交通業にどの程度転化していったか，あるいは近代的工場制工業の企業家へどれだけ転化していったかである³⁾。

その意味で，ここではプッティングアウト・システムに注目してみたい⁴⁾。

2) プッティングアウト・システム

まずクルーゼ (François Crouzet, (2001), pp. 61-63) の引用からは始めることにしよう。「13世紀から1700年代初期まで，多くの技術革新にもかかわらず，繊維においてさえ，工業の労働生産性には大きな増加はみられなかった。他方，工業組織には重大な変化があった。第1に，多くの製造業一特に熟練度の低い仕事一が，都市に比べ賃金が低く，職人ギルドが制限的慣行を強制できない農村部へと移動した。第2には，農村工業が『商業資本主義』とも呼ばれる，フェアラーク (Verlag) あるいはプッティングアウト

-
- 3) マーチャント・マニュファクチャラー（商人・生産者）というような「複業者」(dual occupations) は，農民・生産者 (farmer-manufacturers), 冒険商人 (marchant-adventurer) など，複数の役割を兼ね備えたものであり，役割が固定しているわけではない。工場制工業社会になっても現代ほど雇用関係が明確になっていなかったことから，複業性は明確には定義しにくいものと思われる。わが国でも，明治時代に「半農半工」が広くみられたし，農民が農閑期に鉄道員を兼務する「半農半鉄」時代もかなり長く続いた。
- 4) プッティングアウト・システム (putting-out system) という言葉は，経済史研究者の間では古くから「問屋制度」と訳されたり，「前貸制度」，時には「外業化」と訳してきた。現在でも西洋経済史学会では，そのまま定着してしまっているが，あえて「プッティングアウト・システム」という原語のカタカナ表現を採用することとした。問屋制度とか前貸制度といっても間違いだとは思わないが，原材料の調達と製品販売を一手に引き受けて，生産を委託するという商業行為がプッティングアウトであり，委託者がプッターアウト (putters-out) である。委託生産あるいは加工委託が主たるものであり，むしろ下請生産 (subcontracting) に近く，現代風にいえばアウトソーシングとほぼ同義だからである。前貸制度から連想される原材料調達のための資金繰りを支援する金融（前払い advance）や買い占め目的の前払いなど，さまざまなケースが考えられるが，いずれも資金供給の意味で使われるケースが多く，プッティング・アウトとは少し違うような気がする。

プロト工業化とプッティングアウト・システム

ト・システムの下に組織されるようになった。それはもっとも早くから発展したフランダース、ノルマンディー、イングランドにおいて13世紀後半に出現したものである。商人—「マーチャント・マニファクチャラー」と呼ばれた一は（多くの女性を含む）何百人という人を雇用した。かれらはたとえ道具や（手織機のような）簡単な機械をもっていたとしても出来高払いの賃金労働者以上にできるものではなかった。商人は生産から販売にいたる、全体の流れを管理し、労働者に原料を供給し、注文にしたがって製品を販売した。このシステムは繊維工業から、それ以外の靴、道具、武器、時計、その他金属製品にも広がった。にもかかわらず、典型的な生産単位は小さな家庭の職場であり、（伝統的技術は規模の経済がないため）『家内工業システム』（domestic system）という表現で呼ばれる。一部の部門でだけ、技術的必要から（『プロト工場』（protofactories）あるいは『エンブリー工場』（embryo-factories））におけるより一層『集中的生産様式』（centralized mode of production）をとった。その典型は、鍛冶屋、ガラス工場、砂糖精製などの熱炉工業である。醸造工場、製紙工場、絹糸工場なども含まれる。他の大事業所は政府によって設立された。海軍の造船所（最初の造船所はヴェニス造船所）や王立工廠がそれである。王立工廠は17世紀から18世紀にかけてフランス、その他の国で創設されたが主として奢侈品の製造のためであった。それは大きな建造物と多数の労働者が働くものであったが、機械はほとんど利用しなかった。

家内的であり資本主義的であり、またしばしば遠隔地市場を市場とし、1700年代にピークを迎えた農村工業の勃興は、近代初期ヨーロッパ経済史の重要な側面である。経済進化の単独の段階として「プロト工業化」という特別な命名に値するほど際立っていた。人口と農業との関係を研究したアメリカの学者である故フランクリン・メンデルスがこの言葉を造語した。プロト工業化は、主として稠密な人口のため農業からえられる乏しい所得を補う必要があった地域で発展した。それは土地がやせており、細

分化されていたとか、あるいは土地は肥沃であるが人口が多く、多くの土地をもたない人が多く、過少雇用状態にあることなどのためである。それはまた商業的農業の進歩と同時に発展した。そのため労働者は同じ地域で、遠く離れなくても生活できた。後者の場合には、農業と製造業の間で地域間の互惠関係が成り立っていた。さらに、メンデルスは、プロト工業化は『近代工業化そのものを準備した』、すなわち、機械化された工場制工業を準備したと考えた。この見解は論争を呼び、プロト工業化は『あまりに多くの見方』(a concept too many) を呼び起こした。プロト工業化のいくつかの地域では19世紀中に衰退する一方、一部地域の近代工業化はプロト工業化を経過していないところもある。したがって、後者は本来の工業化の先行条件とはいえない。にもかかわらず、私は、最近の学者によって認められ、評価されたところを見る限り、プロト工業化はいくつかの違いのある複雑な現象であることをはっきりさせるには役に立つ概念であると思う⁵⁾

クルーズのいうところを一言でいうならば、都市工業に制約から逃れてきて発展した農村工業はプッティングアウト・システムの導入によって、プロト工業化を先行条件として工場制工業への足掛かりをえた。その意味で、プッティングアウト・システムはプロト工業化の中心的システムであ

5) この時代の状態について、アッシュトン (T. S. Ashton, (1948), 邦訳, p. 42-43) は、次のように述べている。「ランカシャーの織物工業の組織はこれを簡単な言葉で表現することは出来ない。中心的人物は商人や織元や麻織物商であり、彼らが前貸人 (putter-out) を雇って、直接散在する紡績工や織布工の原料を前貸しさせるか、あるいは又、先ず農村の製造業者に原料を前貸しさせ、ついでその農村の製造業者がそれを彼ら自身の縄張りで前貸ししたと言えれば充分であろうか。そのエネルギーを鋤と織機に分割使用していた借地農織工業 (farmer weaver) もいくらかいた。……18世紀前半においてさえ、すでに織物工業には変革の兆候が見えていた。あちらでもこちらでも、技術的理由の故に、人々が作業場や小さな水力工場に集められ、小集団を形成しつつあった。多くの発明や実験が行われた、1717年、トマス・ロム (かれの兄弟はイタリアから機械の設計を持って来た) はダーウエント河のほとりに本格的な工場を建設し、そこには三百人に近い労働者が絹燃糸に従事していた。この工場は多数の同じような工場の先駆となった」

るといってよかろう。プロト工業化は、やがて近代資本主義に固有な工場制工業への梃子の役割を果たしたことになる。産業革命は、まさにプロト工業化によって産み落とされた歴史の重要な変革であり、突然現れたものではないということになる。

次にランズ (D. S. Landes, (2001), pp. 43-44) からの引用も加えておきたい。「都市の閉鎖性は工業生産の農村への広がりによって打ち破られた。季節的で、不規則な活動パターンをもつ農業は、活用されていない労働のプールを提供した。それは都市の外では女性と子供の活用に制約がなかったためますます大きくなった。婦人と子供は総体的賃金が低かったために、賃金に比べ多くの生産物を生産した。初めから (13世紀) 商人は退屈で、熟練を要しない仕事をさせるために小屋住み職人を雇い始めた。もっとも重要な部門である、織物製造業においては、農婦はプッティングアウト・ベースで紡績を行った。すなわち、商人が原材料―原毛、亜麻、後に綿花―を配り (プット・アウト)、できあがった織糸を集めた。

このようなアウトソーシングへのシフトは、初めは都市職人からの抵抗はほとんど受けなかったが、商人が小屋住みの織布工に織糸のプッティングアウトを始めたとき、その時代のもっとも有力な利害関係者のひとりである、都市ギルドの織布工を非難するようになった。かくして事態はほとんどないことになった。イタリアーでは、周辺農村に政治的支配権を握っていた自治都市は、この『不公正な』競争を打ち破ろうとした。他の大きな中世からの衣料製造センターである低地国では、都市の織布工が小屋住み織機を破壊するために村に押しかけた。農村の織布工は反撃したが、プッティングアウト・システムは数世紀にわたって妨害を受けた。プッティングアウトが自由であった国はイングランドであるが、そこでは地方の政治的自立性が強く、君主が独占に走る組合 (ギルド) の主張を容れにくくし、ギルドは早々と儀礼的な同業者仲間になりさがってしまった。15世紀までに国の羊毛製品の半分以上が農村の小屋で生産されていた。このような低

プロト工業化とプッティングアウト・システム

賃金労働に頼るやり方が、コストを下げ海外での競争に勝つのに役だった。したがって、16世紀までに原毛を含む第一次製品の輸出国となった国がヨーロッパの主要工業国となる道にうまく乗った。

中世ヨーロッパの経済的拡張はこうして組織の革新とその適応によって促進されたものであるが、そのほとんどは下から始まり、先例にしたがって拡散したものである。支配者は、地方領主であっても、ペースの維持に努め、手厚く受け入れ、労働を利用しやすくし、企業とそこから生まれる収入を引き付けようとした。同時に、実業界は、投資を確保し、支払いを促すための新しい形の組織、契約、為替を発明した。この数世紀間に全面的な商業上の道具が利用され、商法典が立法・施行されていった。貸手と執行者との連携、資金や商品供給をする人と遠隔地に売買をするひとの連携を促進するための組合組織が考え出された。このような「商業革命」のほとんどすべてが、商業界からきており、それを都市や国家のようなルールの必要なところに繋いでいくと同時に、新しい出会いと交換の場（港、ファウブルク、地方市場、国際見本市）を改良して、端的に言えば複雑で、不便なモザイクの上に重ねたような世界を作り出した。

彼らはそれによって実質的にセキュリティを高め、事業を行うコスト（経済学者が「取引費用」と呼ぶもの）の大幅な引き下げ、専門化と分業によって市場の拡張を可能にした。それはアダム・スミスの世界であり、それはかれの時代より500年以上も前に形をなしていたのである」

この引用が明らかなように、プロト工業化時代は、プッティングアウト・システム（すなわち、委託生産によって生産された商品は遠隔地あるいは外国に商人（putter-out）によって販売される生産販売システム）によって出来上がったのである。しかし、旧来の生産システムによる生産ではやがて需要の増大に対処できなくなり、工場制工業、すなわち機械による大量生産に向かう必然性が生まれたのである。いいかえれば、機械による大量生産から需要の開拓が不可欠になったというよりは、商人による市場開拓が先行し、

それに工場制工業が追随したことが近代資本主義発展の原動力になりえたと見るのが素直ではないだろうか。

[補足]

イギリスでは、プッティングアウト・システムから工場制工業への移行がスムーズに進んだわけではない。このような事情を、ランズは次のように述べている。「機械化への関心が起こったのは何故か。主として、繊維工業の成長が労働力供給を追い越し始めたからである。イングランドは地方製造業（プッティング・アウト）の力を非難し始めた。しかし、丘や谷を越えて生産が分散することは輸送コストを引き上げた。こうして、雇用者は需要に応えるために賃金を引き上げた。すなわち彼らは最終工程の代価を上げた。しかし、それに驚いた職人は、所得がたかくなった分レジャーに時間を割くようになり、実際には労働供給は減少した。商人生産者は踏み車の刑を課した。自然の本能にさからって、高い食糧費を要求するようになった。おそらく生計費の上昇から紡績工や織工は働かざるをえなくなった。

しかし、労働者は市場からの刺激に反応した。彼らは仕事の契約者であり、かつ労働者であり、この二重の地位から、プッターアウトを犠牲にしても自分が豊かになる機会を求め始めた。紡績工も織工もひとりの商人から資材を受け取り、それからできた最終製品を別の競争者にうったり、次々にしきりを設けて、最大限に義務を欺くようになった。……落胆した生産者は紡績工や織工を監督下におき時間通りに、終日働かせようと考えを改め、大きな工場に変えることを考えたとしても不思議ではない。それは小さな問題ではない。結局小屋住み工業は商人・生産者（マーチャント・マニュファクチャラー）より優れた長所をもっていたのである。特に、参入コストが少なく、間接費が少ないという長所をもっていたのである。このような生産様式の下では、工場・設備を供給したのは職人であった。そ

して、もし仕事ができるければ、ブッター・アウトは簡単に注文を取り消すことができた。それに比べ、大きな工場や店舗には大きな投資が必要であった。仕事を始めるにあたっては土地、建物それにプラスして機械が必要である。

さらにプッティングアウトは誰にでもおなじみであった。職人は、規則にしばられない自由を好み、必要に応じて仕事をやめたり続ける特権を持っていた。労働のリズムがこのような独立性を反映していた。織工は典型的には週日には長く休み、あそんだ。週末になると、土曜日の集配の支払いのためによく働いた。金曜日には夜を徹して働いた。土曜日の夜は酒盛り当てられ、日曜日にはビールやエールをあおった。月曜日(聖なる日)は神聖な日で、火曜日には聖なるところから現実に戻る必要があった。

このような工業内のいざこざーマルクス主義者がいうところの内部矛盾一からの当然の帰結として、職人をひとつ屋根の下に集め、職人を監視し、監督しなければならなくなった。しかし、生産者は人々を小屋から工場へできるように説得するためには何がしかの支払いをしなければならないことが分かった。“工場の機械が小屋それと同じなら工場生産はコストがかかる”という法則が当てはまらないのは、熱を利用する技術(湯通し、醸造、ガラス製造、製鉄など)である。そこには集中によって生み出された貯蓄は資本費を埋め合わせてなお余りがあった。しかし、繊維製造においては労働を集中させようとする努力はイングランドでは16世紀まで溯るが、常に失敗してきた。それはヨーロッパではうまく行った。ヨーロッパでは、政府が工業促進のために工業に補助を与え、大きな手工場ー“マニユファクトリー”あるいは“プロトファクトリー”ーに労働を割り当てたりしたからである。しかし、それは人為的な繁栄であり、支持がなくなると破産した。……高賃金にもかかわらず、工場は古い時代の人にとっては監獄であった。では初期の工場所有者はどこから労働力を集めたのか。イングランドではそれは貧民窟からかき集めた(買って来た)子供であり、また特

に未婚の女性であった。大陸では、生産者は囚人や軍人と交渉出来た。カール・マルクスが近代工業と呼んだものはこうして生まれた。それは機械と動力の結婚の成果であり、力（説得力とエネルギー）と力（政治力）の結婚の成果でもあった」(Landes, op. cit. pp. 207-210)

ランズと同様に、ロイ・ポーター (Roy Porter, (1982), p. 342) も、次のように述べている。「数世紀にわたって、プッティングアウト・システムの下請け契約は資本家にとっては産業組織の適正な様式として常識となっていた。中央工場に大きな投資、時には道具への投資さえ逃れることができ、労働者をすぐに解雇でき、職場の維持・修繕、労働規則、資材の調達などはすべて労働者の問題であった。それは弾力的なシステムであり、雇用者の責任をもっとも少なくするものであった。」

3) プッティングアウト・システムをめぐって

(1) プッティングアウト・システムと大塚史学

プッティングアウト・システムは、前述のように都市から地方に分散した農村工業に生産をプットアウト（外へ出す）し、生産された製品を商人が遠隔地ないし外国に販売するというシステムである。しかもそれは工場制工業を中核とする産業革命前夜の工業化、すなわちプロト工業化の中心的役割を果たしていた。したがって、プロト工業化を支えていたプッターズ・アウトを無視してはプロト工業化の存在理由はありえない。

そこで注目しなければならないのは、大塚史学はプッティングアウトの役割をどのように見ていたかという点である。大塚は、商業資本と中産的生産者層を対比させながら、次のように述べている。「封建的農奴制を崩壊させつつ『自営農民層』を成立せしめて以て農村におけるより自由な生産事情を創出して行った主体的推進力は、そもそも商業資本と中産的生産者層（ここでは農民層自体）の何れに求むべきであろうか、と。この点に関する通例の見解は之を商業（商業資本）に求めている。しかし乍ら古く

より之と異なった見解がない訳ではない。——（中略）——近代的産業資本の形成過程においては、そのための主観的条件のみならず客観的条件もまた決して商業及び商業資本の発達一般のうちに求むべからざる事は略明らかであろう。それどころか商業資本は歴史上、産業資本の形成を抑止し、却って旧来の生産事情を維持しようとする保守的性格をしばしば強く示して来た」（大塚，（1950），pp. 95-97）

この引用文は、1941年5月25日の日付の論文「近代資本主義発達史に於ける商業の地位」の中の一部であるが、大塚は産業革命前の商業の役割についてどちらかといえば否定的な見解を述べている。この点は、河野健二が「西洋商業史」（（1956），p. 130-131）の中で述べていることとの間には大きな乖離がみられる。

とはいえ、商業が産業資本の形成に抑止効果があったと述べた翌年の1942年には、「問屋制度の近代的形態—特に18世紀イギリスに就いて—」という論文（『経済学論集』第12巻11号）を発表し、プッティングアウト・システム（大塚の用語では「問屋制度」あるいは「前貸制度」）の吟味を行っている。その冒頭に「凡そ所謂『問屋制度』が近代経済社会の如何なる発展段階においてもつねに『阻止的』な性格をもったかと云えば、私はさようには考えてはゐないのであって、寧ろ客観的事情（近代的経済社会の発展段階乃至構造の類型如何）によっては却って『促進的』に作用する場合の存する事も十分承認するものである」（近代資本主義の系譜，p. 105）と述べ、18世紀ランカシャーの綿織物工業の問屋制前貸人 *putters-out* の3つの類型を詳しく述べている。①Merchant Manufacturers, ②Middlemen Manufacturers, ③Master Manufacturers の3つの類型がそれであるが、これらは「産業資本家たるまま『工場』なる形でその経営規模を未曾有に拡大しうる可能性が拓かれた」が、「要するに、『問屋制度』は、その近代的形態においてかように産業資本の発達を促進的に媒介したのであっても、それ自体としては、結局近代資本主義成立過程における単なる媒介的契機に過ぎ

なかったのである」(p. 126)と述べるだけで、工場制工業への転換にあたって(大塚のいう)問屋制度が果たした役割についてはほとんど述べていない。

この論文が執筆された太平洋戦争を時代背景として、商業などの職業に対する偏見が強いということも決して軽視するわけにはいかないが、クルーゼあるいはランズなどとは違って市場の拡大がもつ効果に対する認識が不十分だというそしりはまぬかれないのではなからうか。大塚史学が当時の西洋経済史研究に果たした役割の大きさは否定できないとしても、アダム・スミス(諸国民の富、第1編第3章)、あるいはヒックス(経済史の理論、第3章)などが市場の発展を重視していることと対比してみたとき、プッティングアウト・システムが開拓した「市場の大きさ」(需要)が、続く機械の導入による大量生産(供給)への地ならしをしたはずである。「分業は市場の広さによって制限される」(アダム・スミス)という市場論的視点が大塚史学においてはなぜ無視されてしまったという問題は残り続けるであろう。

(2) プッティングアウト・システムと労働問題

これまでマルクス経済学では、産業革命によって、それ以前の独立労働が賃労働へ転換するした事実を労働のプレタリア化として分析してきた。しかし、実態はかなり違う。プロト工業化の時期には、商人生産者(merchant-manufacturer)の指示にしたがって生産資材が生産者(下請け職人や小屋住み職人など)に分配されていた。需要が拡大する過程(市場の拡大)で、旧来の不規則生産、生産の遅延、製品のむらなどの生産過程の欠陥が表面化するようになった。職人のオポチュニズム(逆選択)から製品の安定的供給の保証がなくなった。このようにして生産者と商人(プッターズ・アウト)の関係が不安定になり、生産過程の管理・監督が不可欠となった。すなわち、生産過程の労務管理と資材・製品取引のモニタリングが不可欠となった。その結果、マーチャント・マニュファクチャラーが「独立

労働」に依存することを忌避するようになり、工場制生産へと転換させていった。すなわち、マーチャント・マニファクチャラーの視点からすれば、プッティングアウト・システムの階層組織への転換が生産体制として効率的であったのである。それは資本主義体制の「合理化」(ratinalization)への方向であった。かくして工場制工業は、一面ではマーチャント・マニファクチャラーによって推進され、職人生産者などからも推進されていくことになるが、マーチャント・マニファクチャラーは管理・監督機能、市場開拓機能、販売機能などの近代的経営へと近付いていくことになる。産業革命期には、企業家は一人で資本家、ファイナンシヤー、労務管理者など多面的機能を果たすが、19世紀中葉になってジョイント・ストック・カンパニーの出現によって企業家機能が確立するようになり、資本と経営の分離が起こるようになる。

一方、労働者の観点からすれば雇われることは「従者」となることを意味する。ヒックスの言葉をもってすれば、「指令体制こそともと階層的(それに思考)な指導者と追隨者、領主と家臣、主人と従者という関係をもとにしておこなわれるのである。これは一部は力に基づいているが、一部はその会計が内包する多様な倫理的感情、すなわち一方における責任感に基づいている関係なのである。商人的経済体制は階層的ではないのであって、買い手と売り手は『同等の地位』にあり、一方が主人で他方が従者でなければならないという理由は存しない。主従の関係はその体制に適合しないのである」(J. R. Hicks, (1969), 邦訳, p. 184)

工場制工業の確立過程における労働問題は、1970年代以後の取引費用経済学におけるマーケット・ガバナンスとの関係から再検討が行われてきた。工場制工業によって労働が企業内に内部化されたのは一言でいえば労働のオポチュニズムを封殺することによって労働生産性の向上を促進するためであったという解釈である。しかし、このようなオポチュニズムだけによって解釈することは、雇用者と労働者の関係を人間的関係とみる見方から

すれば一面的であり、組織形態によっても多種多様な労働関係が成立することをどう解釈するかという問題を残すことになる (cf. C. Pitelis, (1991), chpt. 2)。これは1970年代以後、コース、ウイリアムソンの「ガバナンス理論」、あるいは「エージェンシー理論」など、組織が企業論における大きな研究課題となる伏線になっていたように思われる。

参 考 文 献

- 1) T. S. Ashton, (1954), *The Treatment of Capitalism by Historians*, in *Capitalism and the Historians*, ed. by F. A. Hayek, The Univ. of Chicago Press.
- 2) 馬場哲, 小野塚知二編, (2001), 西洋経済史学, 東京大学出版会。
- 3) 大塚久雄, (1981), 近代欧州経済史序説, 岩波書店。
- 4) 堀米庸三, (1964), 歴史をみる目, 日本放送出版協会。
- 5) Mauris Dobb, (1946), *Studies in the Development of Capitalism*, London. 京大近代史研究会訳, (1954), 資本主義発展の研究, 岩波現代双書。
- 6) F. F. Mendels, (1972), Proto-industrialization: The First Phase of Industrialization Process, *Journal of Economic History*, XXXII.
- 7) L. A. Clarkson, (1985), Proto-Industrialization: The First Phase of Industrialization? MacMillan. 邦訳, 鈴木健夫, (1993), プロト工業化, 工業化の第一局面か, 早稲田大学出版部。
- 8) J.Kocka, (1978), *Entrepreneurs and Managers in German Industrialization*, in *The Cambridge Economic History of Europe*, VII, *The Industrial Economies: Capital, Labour, and Enterprise*, Part 1, pp. 492-555.
- 9) François Crouzet, (2001), *A History of the European Economy, 1000-2000*, Univ. Press of Virginia.
- 10) D. S. Landes, (1998), *The Wealth and Poverty of Nations, Why Some Are So Rich and Some So Poor*, W. W. Norton & Co.
- 11) T. S. Ashton, (1948), *The Industrial Revolution*, Home Univ. Library. 中川敬一郎訳, 産業革命, 1973, 岩波書店。
- 12) Roy Porter, (1982), *English Society in the Eighteenth Century*, *The Pelican Social History of Britain*.
- 13) 大塚久雄, (1950), 近代資本主義の系譜, 学生書房。

プロト工業化とプッティングアウト・システム

- 14) 河野健二, (1956), 西洋商業史, 日本評論新社。
- 15) J.R.Hicks, (1969), A Theory of Economic History, Oxford. 新保 博訳, 経済史の理論, 日本経済新聞社, 1970年。
- 16) Christos Pitelis, (1992), Market and Non-market Hierarchies–Theory of Institutional Failure–, Blackwell.